

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和6年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第4号（7月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujoshou/index.html>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp



農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海等への汚染防止)
(養蚕，養蜂等への危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう

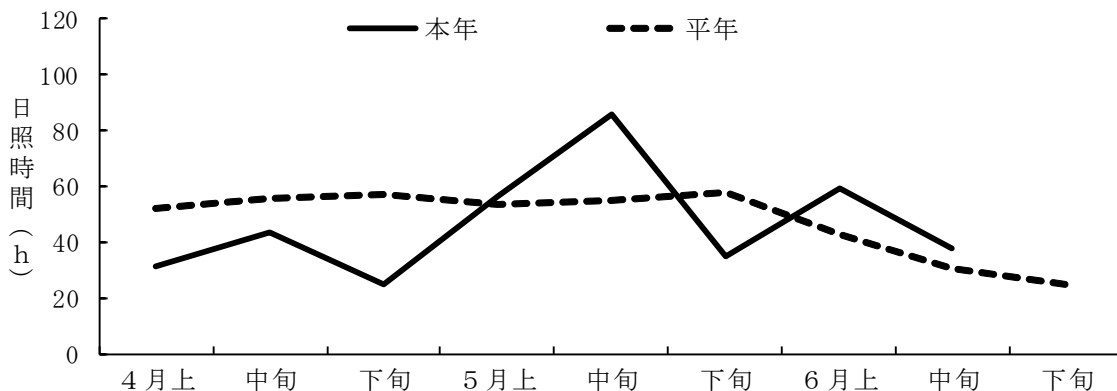
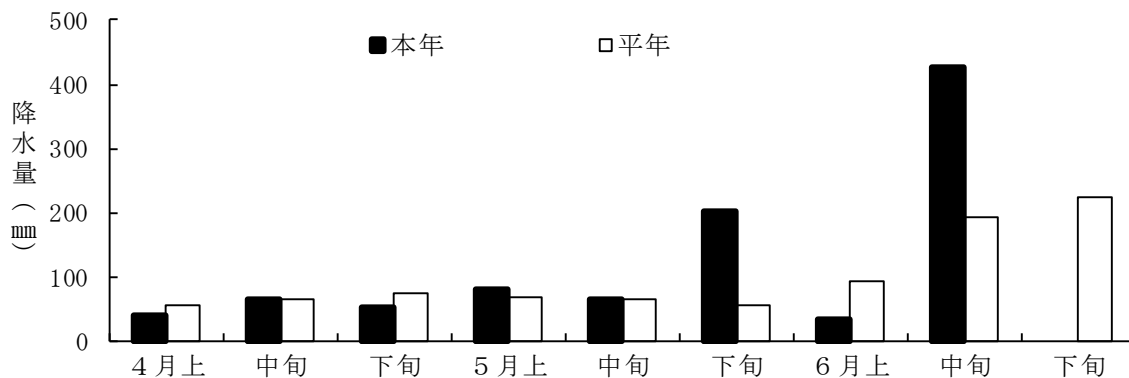
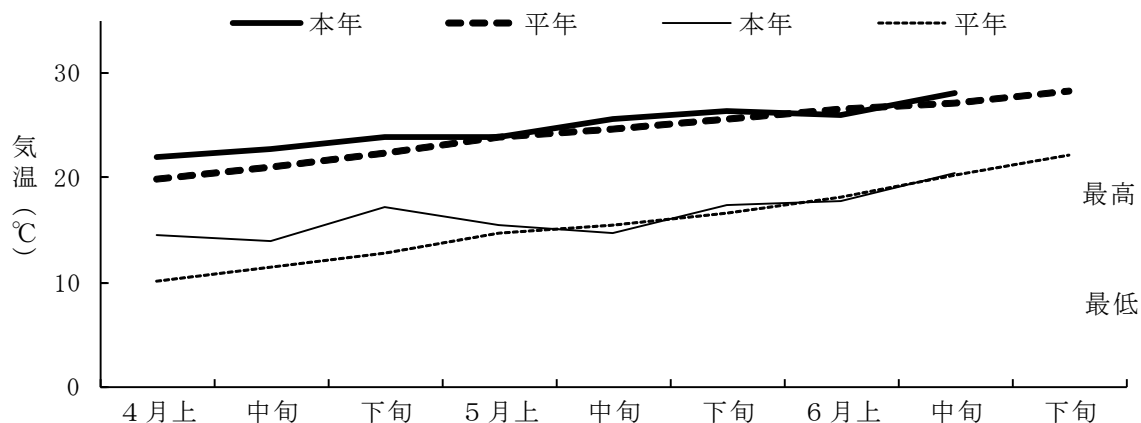
令和6年度 病虫害発生予報 第4号

令和6年6月27日
鹿児島県病虫害防除所

I. 向こう1か月の予報（6月22日から7月21日） 令和6年6月20日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	10	80	気温は両地方とも高い。降水量は九州南部がほぼ平年並、奄美地方が少ない。日照時間は九州南部がほぼ平年並、奄美地方が多い
	奄美地方	10	10	80	
降水量	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	50	30	20	
日照時間	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	20	30	50	

II. 4～6月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
普通作物	早期水稲	いもち病（穂いもち）	やや少	やや少
		斑点米カメムシ類	多	多
野菜	イチゴ（苗床）	うどんこ病	並	並
		炭疽病	やや少	並
		ハダニ類	多	多
	サトイモ	疫病	少	やや少
	野菜・花き共通	ハスモンヨトウ	並	並
花き	キク（施設）	白さび病（県本土，施設）	やや少	やや少
		ハダニ類（県本土，施設）	多	多
		アザミウマ類（県本土，施設）	多	多
果樹	カンキツ	そうか病（果実）（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		かいよう病（果実）（県本土・熊毛地域）	並	並
		〃（奄美地域）	並	並
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや少	並
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	炭疽病	並	並
		輪斑病	並	並
		チャノコカクモンハマキ	多	多
		チャハマキ	多	多
		チャノホソガ	並	やや多
		チャノミドリヒメヨコバイ	多	多
		チャノキイロアザミウマ	並	並
		クワシロカイガラムシ	やや少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 普通作物

1. 早期水稲

(1) いもち病（穂いもち）

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

葉いもちの発生ほ場率10%（平年20%）

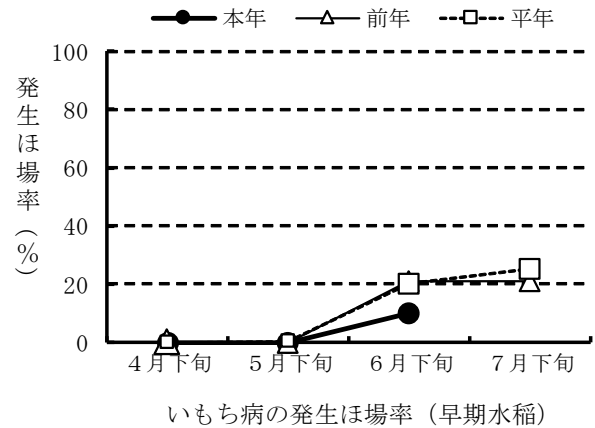
：低い

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ほ場を見回り、葉いもちの発生を確認する。ほ場の中心など湿度の高い場所で坪状に発生していることもあるので注意する。

(イ) 葉いもちの発生ほ場及び発生ほ場の周辺ほ場では、なつほのかなど晩生の品種で穂ばらみ期から穂ぞろい期に、液剤または粉剤により、穂いもちの防除を実施する。

(ウ) 本年は出穂期が早いので防除時期を失しないように注意する。



(2) 斑点米カメムシ類（令和6年度技術情報第13号6月7日付参照）

（クモヘリカメムシ、ホソハリカメムシ等）



ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生時期 出穂期以降

(ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率70.5%（平年70.7%）：並

平均捕獲虫数16.3頭（平年4.6頭）：多

(イ) 県全体における斑点米カメムシ類の程度別発生箇所割合は、中程度以上が27.3%（平年：12.1%）と平年より高く、甚も認められ、過去5年間で最も高い（表、図）。

(ウ) 種別構成比はクモヘリカメムシが59.7%と最も高く、次いでアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシ、ミナミアオカメムシ、シラホシカメムシの順であった。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 斑点米カメムシ類による斑点米の混入は米の検査等級格下げにつながり、特に早期水稲では品質低下の主な要因となる。

(イ) 毎年斑点米被害が多い地域では、穂揃期と穂揃期の7～10日後（乳熟後期）の2回防除が基本である。特に乳熟後期の幼虫の発生には十分注意する。

(ウ) 防除は農薬の使用基準を遵守し、農薬がほ場外に飛散しないようにする。

表 早期水稻周辺のイネ科雑草地における斑点米カメムシ類の地域別、程度別発生箇所割合 (%)
(令和6年6月3日～4日)

地域	調査箇所数	捕獲箇所率 ^{注1)}	平均捕獲虫数	程度別発生箇所割合(%) ^{注3)}					中以上の発生割合合計
				甚	多	中	少	無	
南薩	24	66.7	24.2	4.2	8.3	25.0	37.5	25.0	37.5
大隅	20	75.0	6.8	0.0	10.0	5.0	60.0	25.0	15.0
県全体	44	70.5	16.3	2.3	9.1	15.9	47.7	25.0	27.3
県全体 ^{注2)}	52.8	70.7	4.6	0.4	0.7	11.0	58.6	29.3	12.1

注1) 捕獲箇所率(%)=捕獲箇所数/調査箇所数×100, 注2) 平年は過去5か年(2019～2023年)の平均値,
注3) すくい取り調査(捕虫網20回振り)の捕獲虫数を基準とし, 甚:61頭以上, 多:60～31頭, 中:30～11頭, 少:10～1頭, 無:0頭とした。

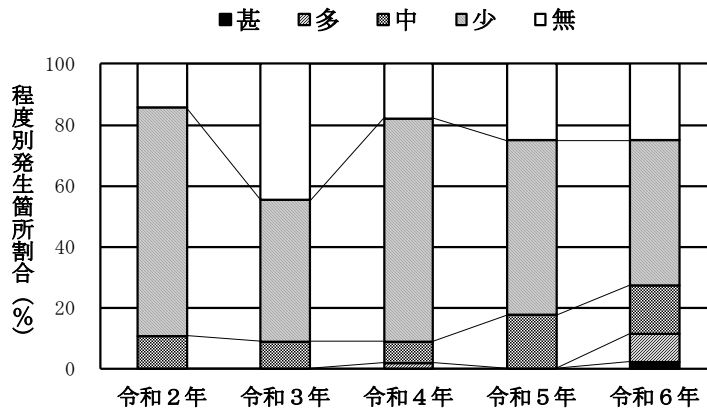


図 早期水稻の周辺イネ科雑草地における斑点米カメムシ類の程度別発生箇所割合の推移

2. 普通期水稻

(1) イネウンカ類およびコブノメイガの誘殺虫数

セジロウンカ：60W予察灯での初誘殺日は4月1日（平年5月19日）で，平年より早かった。
トビイロウンカ：60W予察灯では初誘殺日は6月5日（平年6月24日）で，平年より早かった。
コブノメイガ：フェロモントラップでの初誘殺日は5月27日（平年5月19日）で，平年より遅かった。

表 各種トラップでの誘殺虫数と初誘殺日（農業開発総合センター設置）

月・半旬	セジロウンカ				トビイロウンカ				コブノメイガ	
	60W予察灯		大型吸引トラップ		60W予察灯		大型吸引トラップ		フェロモントラップ	
	本年 ^{注1)}	平年 ^{注2)}	本年	平年	本年	平年	本年	平年	本年	(平年) ^{注3)}
5. 5	3	1.8	0	0.6	0	0	0	0	0	(1.7)
6	82	2.0	5	1.1	0	0	0	0	4	(2.7)
6. 1	0	11.2	2	1.8	1	0	0	0	0	(9.0)
2	76	21.8	26	4.0	0	0.1	0	0	0	(22.0)
3	4	19.5	0	11.0	2	0	0	0	0	(12.0)
4	33	36.7	23	8.9	2	0.2	0	0	0	(15.6)
5	485	12.7	37	7.4	5	0.4	5	0.2	0	(10.3)
6		35.5		9.9		7.8		0.9		(6.3)
合計	683	141.2	93	44.7	10	8.5	5	1.1	4	(79.6)
初誘殺日	4/1	5/19	4/30	5/25	6/5	6/24	6/21	7/13	5/27	(5/19)

注1) 本年5半旬のデータは，6月21～23日の合算。 注2) 平年は2014年～2023年の10年間の平均。 注3) (平年)は2018年～2023年の6年間の平均。なお，最新の誘殺状況は，ホームページ (<https://www.pref.kagoshima.jp/ag13/kiad/boujosho/>) を参照。

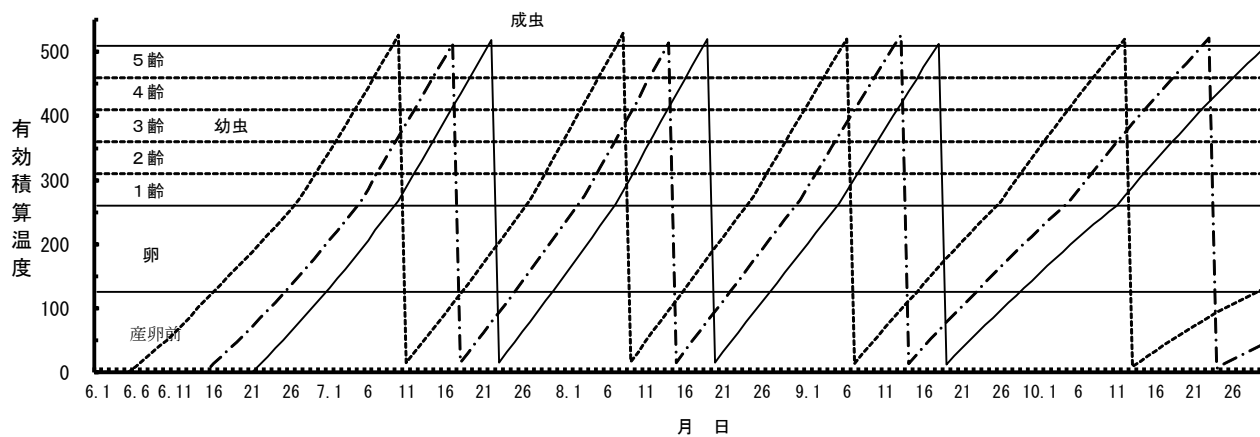


図 トビイロウンカの有効積算温度による発生経過予測図（参考）

注）金峰町の60W予察灯に誘殺された6月5日，6月15日，6月21日を起算日とした。

気温は，加世田のアメダスポイントデータを利用した（6/20以降平年値）

Ⅱ. 野 菜

1. イチゴ（苗床）

（1）うどんこ病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：並

発生ほ場率50%（平年45%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

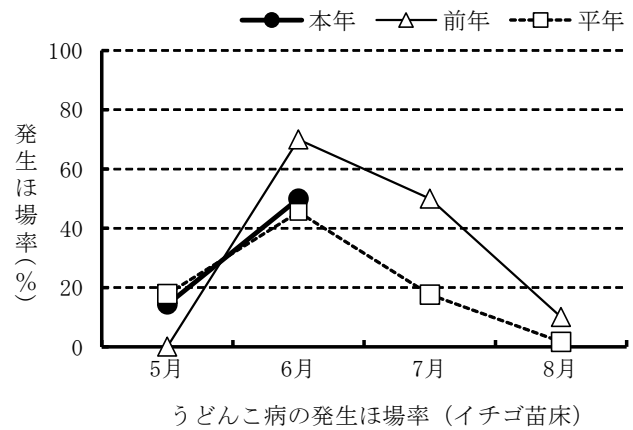
（ア）本病が発生しやすい葉裏をよく観察し、
早期発見と初期防除に努める。

（イ）雨よけ育苗施設では発生が多くなる傾向にある。

（ウ）発病葉や古葉は除去し、ほ場外へ持ち出して処分する。

（エ）ランナー切り離し前までの防除を徹底し、葉裏や下位葉に薬液が十分かかるよう散布する。

（オ）作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



（2）炭疽病

ア 予報内容

（ア）発生地域 県本土

（イ）発生量 並

イ 予報の根拠

（ア）調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0%（平年2%）

：やや低い（-）

（イ）気象予報

気温：高い（+）

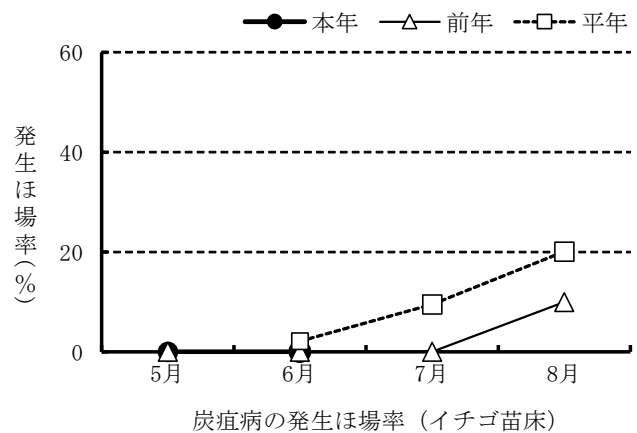
ウ 防除上注意すべき事項

（ア）苗は十分な間隔を置いて並べ、通風を図る。

（イ）雨よけ、排水対策及び防風対策を徹底する。灌水はできるだけ水滴が小さくなる灌水チューブ等を用い、適正な水管理に努める。

（ウ）生育不良の親株や萎凋した苗は発病している可能性があるため、早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。

（エ）農薬による予防散布は新葉の展開に合わせて行い、株元、ランナー、葉裏などに十分量を散布する。発生が認められた場合は散布間隔を短縮する。



(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率50%（平年21%）：高い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

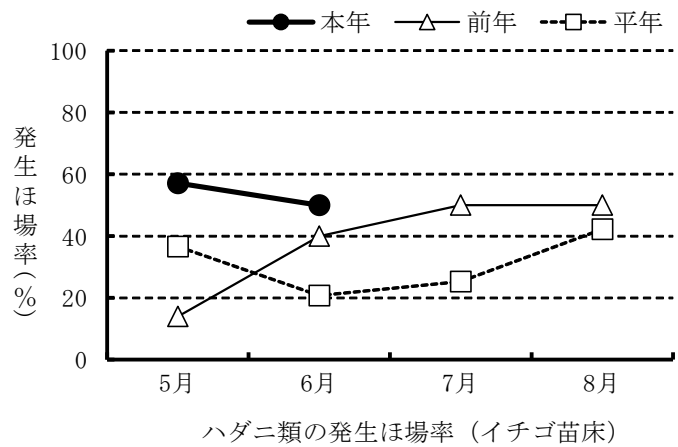
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。

(イ) 農薬の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(ウ) 農薬によっては感受性が低下しているのので、散布後は防除効果を確認する

(エ) 作用性の異なる農薬（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



2. サトイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

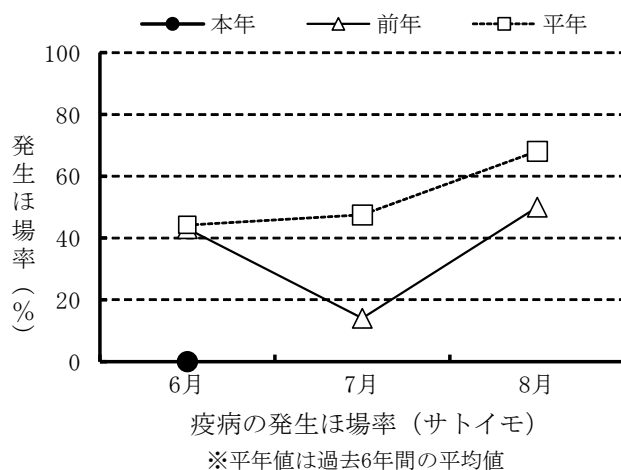
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率0%（平年44%）：低い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ほ場の額縁部分で発生しやすいため、ほ場周辺をよく見回り、早期発見に努める。
- (イ) 発病茎葉は発生源となるので、摘み取ってほ場外へ持ち出し、適正に処分する。
- (ウ) 降雨が続くと急激に発生が拡大するので、発生を確認したら直ちに治療効果がある農薬を散布する。効果的な散布方法については、令和3年度鹿児島県農業開発総合センター普及情報（https://www.pref.kagoshima.jp/ag11/pop-tech/nenndo/documents/documents/97450_20220613131310-1.pdf）を参照。



3. 野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

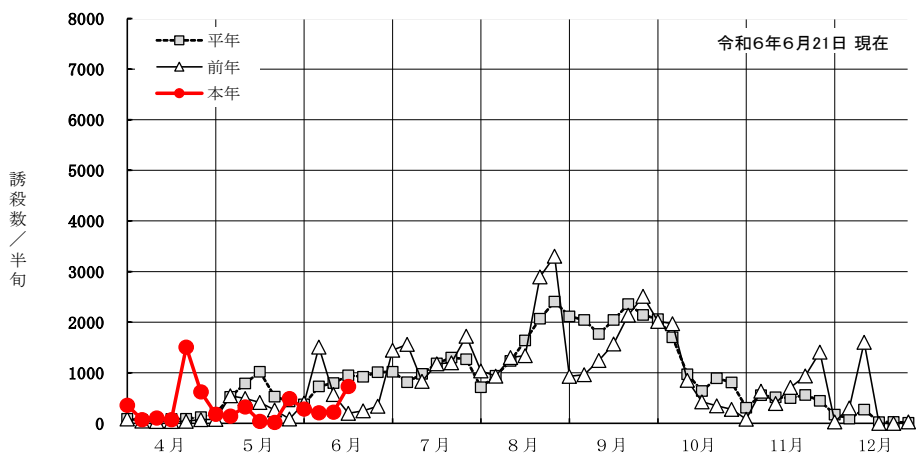
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 サトイモ、根深ネギ、イチゴ、キク等
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
5・6月のフェロモントラップ誘殺数：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害（白変葉）するので、発生を目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると農薬が効きにくいので、防除は若齢幼虫の多い時期に行う。



フェロモントラップによるハスモンヨトウの誘殺状況 (南さつま市金峰町)

防除に関する今月の留意事項

1. トマトキバガ ※令和3年度特殊報第3号（令和4年3月16日付け）参照

本種の寄主植物はトマト、ナス、ピーマン、パレイショなどのナス科植物や、マメ科のインゲンマメ等である。本県では本種の被害を認めていないが、トマトの被害は、葉では内部に幼虫が潜り込んで食害し、葉肉内に孔道が形成される。食害部分は表面のみ残して薄皮状になり、白～褐変した外観となる。果実では、幼虫が穿孔侵入して内部組織を食害するため、果実表面に数mm程度の穿孔痕が生じるとともに、食害部分の腐敗が生じ、果実品質が著しく低下する。

防除対策として、施設栽培ではハウスの開口部や換気部を1mm以下の目合いのネットで被覆し、ハウス内への侵入防止に努める。

なお、本種の発生が疑われる場合は、病害虫防除所（099-245-1157）に連絡する。



令和3年度
特殊報第3号

(参考) トマトキバガについて

【写真提供：宮崎県総合農業試験場】



幼虫の食害による被害葉



幼虫の食害による被害果



成虫：翅を閉じた状態で5～7mm
翅は灰褐色で黒色斑が散在



幼虫：終齢幼虫で約8mm
体色は淡緑色～淡赤白色
前胸の背面後縁に狭い黒色横帯

Ⅲ. 花き

1. キク

(1) 白さび病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0%（平年6%）

：やや低い

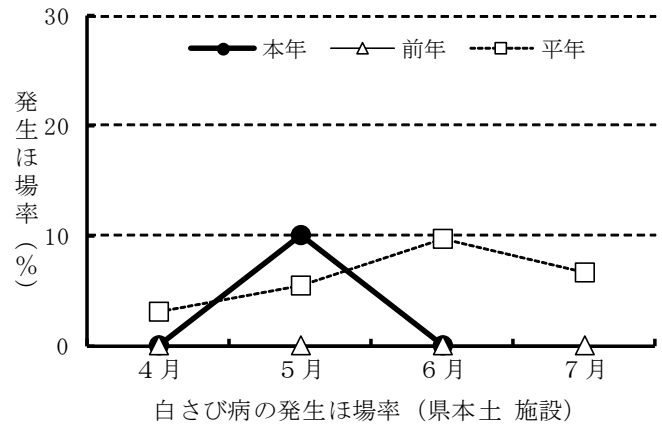
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉は、早めに摘み取って施設外へ持ち出し、適正に処分する。

(イ) 通風換気に努め、過湿にならないようにする。

(ウ) 母株からの持込みを防ぐため、予防散布と初期防除を徹底し、無病穂の育成に努める。

(エ) 作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率50%（平年35%）：高い

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

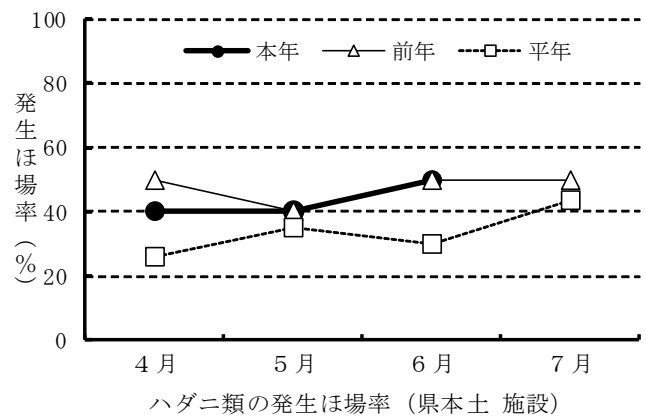
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。

(イ) 薬液は葉裏までよくかかるように散布する。

(ウ) 作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。

(エ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

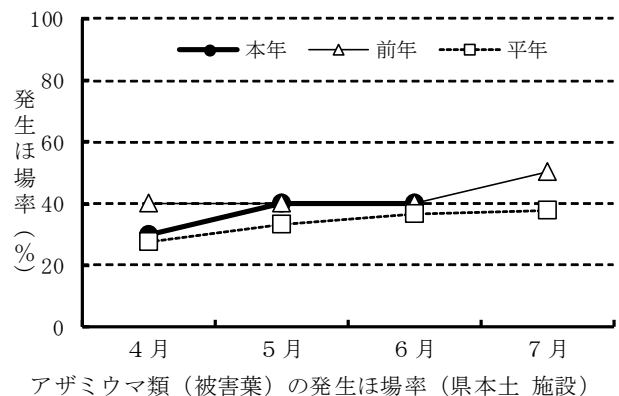
(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率40%（平年33%）：やや高い

多発ほ場を認める（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類の発生動向を把握するためには、出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。なお、クロゲハナアザミウマの誘引効率はやや低いと思われる。
- (イ) 作用性の異なる薬剤（RACコード参照）のローテーション散布を行う。
- (ウ) クロゲハナアザミウマは主に中下位葉に寄生しているため、薬液は下葉の葉裏までかかるよう丁寧に散布する。
- (エ) アザミウマ類はキクえそ病（TSWV）、キク茎えそ病（CSNV）を媒介するので、ほ場への侵入防止と早期発見及び早期防除に努める。
- (オ) ほ場内及びその周辺の除草に努める。

IV. 果 樹

1. カンキツ

(1) そうか病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域（果実） やや多

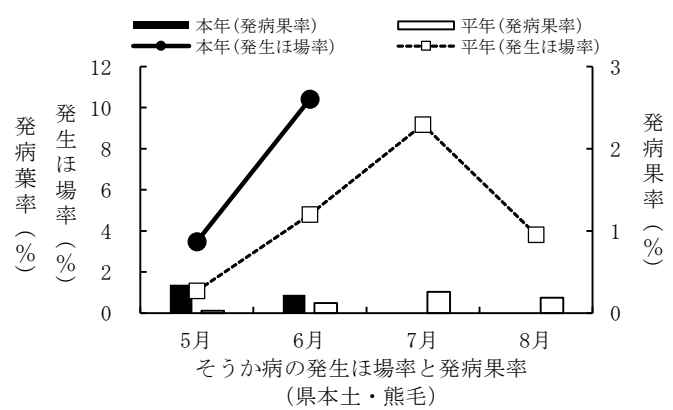
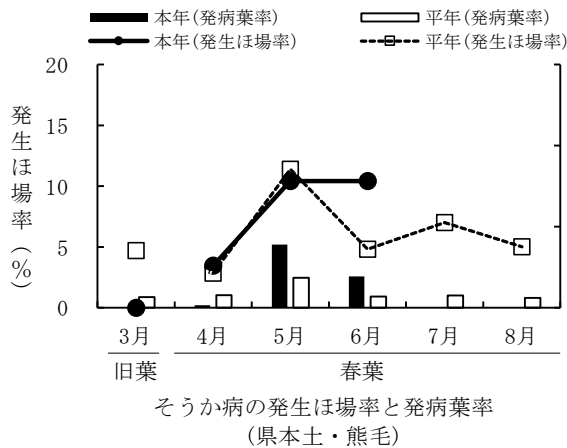
奄美地域（果実） やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや多	やや多
発生ほ場率	10%（平成 5%）：やや高い（+）	10%（平成 5%）：やや高い（+）
発病率	0.4%（平成0.1%）：高い（+）	0.2%（平成0.1%）：並



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや多
発生ほ場率	0%（平成 4%）：やや低い（-）	14%（平成 6%）：やや高い（+）
発病率	0%（平成0.5%）：やや低い（-）	0.3%（平成0.0%）：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 発病葉，発病果は伝染源となるので，ほ場外に持ち出し処分する。

(2) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) 並

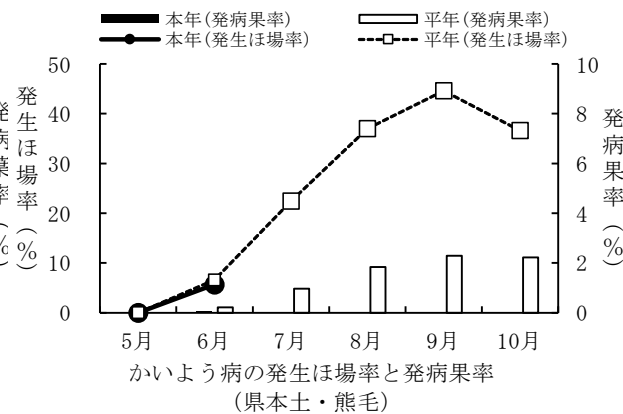
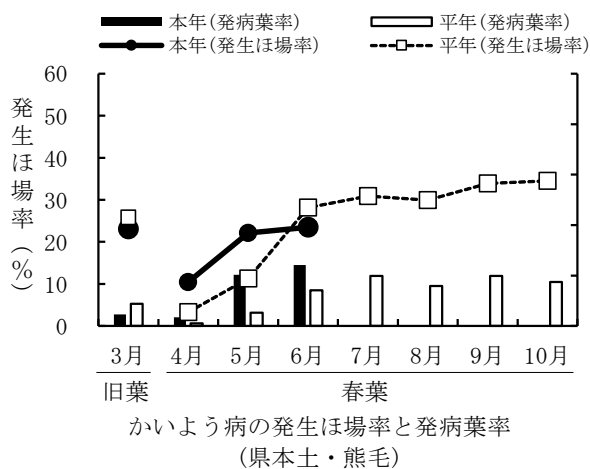
奄美地域(果実) 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	23% (平年 28%) : 並	6% (平年 7%) : 並
発病率	2.4% (平年1.4%) : やや高い (+)	0.1% (平年0.2%) : やや低い (-)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	並	並
発生ほ場率	14% (平年 11%) : 並	0% (平年 0%) : 並
発病率	0.1% (平年0.1%) : 並	0% (平年 0%) : 並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 感染した後では防除効果が落ちるので、予防散布に努める。

(イ) ミカンハモグリガの食入痕から感染しやすいので、ミカンハモグリガの防除に努める。

(ウ) 強風雨等により生じた葉や果実の傷口から感染するので、防風林、防風樹の管理に努める。

(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 並

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：やや少
 発生ほ場率 12% (平年 22%)：低い (-)
 寄生葉率 6.1% (平年5.9%)：並
 発生程度の高いほ場を認めた (+)

(イ) 気象予報

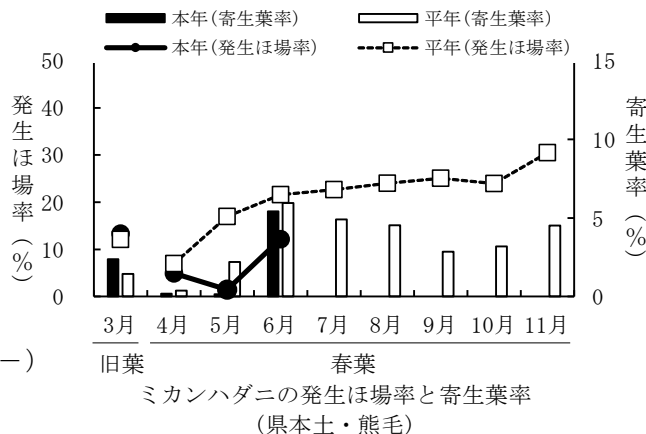
気温：高い (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果(春葉) 発生量：並
 発生ほ場率 0% (平年 1%)：並
 寄生葉率 0% (平年0.0%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭(寄生葉率で30~40%)を目安に防除する。
 (イ) 作用性の異なる農薬(RACコード参照)のローテーション散布を行う。



防除に関する今月の留意事項

1. カンキツ

(1) 黒点病

ア 農薬散布間隔は、散布からの累積降水量250~300mmもしくは、農薬散布後1ヶ月半程度を目安とする。
 イ 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。

(2) ゴマダラカミキリ

ア 成虫は7月中旬まで発生し8月まで産卵するので、成虫の活動がにぶい朝夕の時間帯に捕殺する。また、卵の圧殺・幼虫の刺殺に努める。
 イ 樹冠下の除草は、産卵防止に効果的である。
 ウ 幼木の主幹地際部を物理的に遮断(ストックカバー法)すると、成虫の産卵を防止できる。

時 期	5月			6月			7月			8月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
生 態	← 成虫発生期			← 産卵期			← 幼虫食入期					
物理的防除法	← 成虫の捕殺			← 卵の圧殺・幼虫の捕殺								
生物的防除法	↓			↓			↓			↓		
化学的防除法	← 殺虫剤散布			← 殺虫剤散布			← 殺虫剤散布			← 殺虫剤散布		

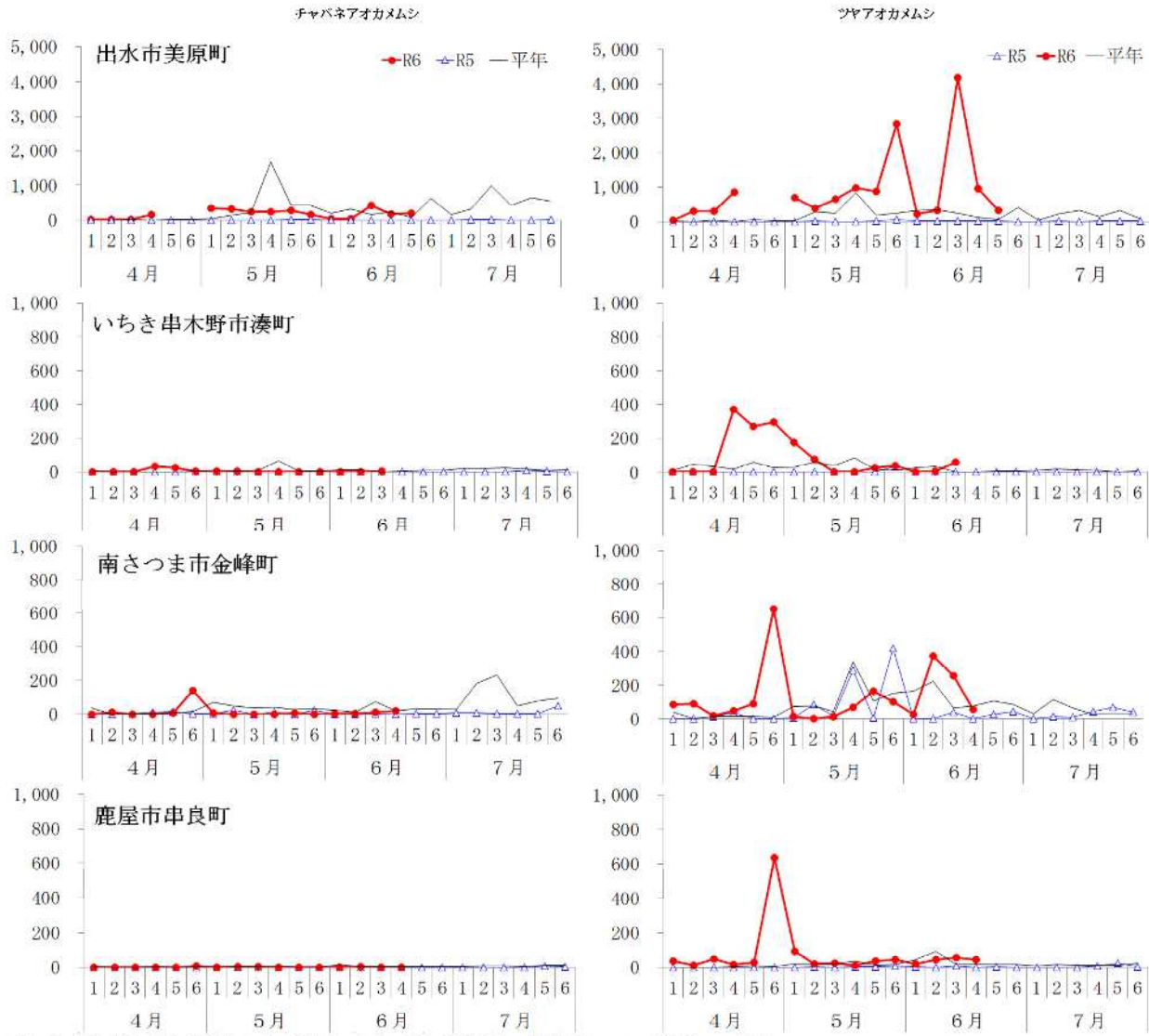
注) 県本土の発育ステージを示す。

2. 果樹共通

(1) 果樹カメムシ類 (チャバネアオカメムシ, ツヤアオカメムシ)

ア 予察灯での6月のツヤアオカメムシ誘殺虫数は、出水市、いちき串木野市及び鹿屋市では3半旬以降で、南さつま市では2, 3半旬で平年より誘殺数が増加している。チャバネアオカメムシの誘殺虫数は、出水市では3, 5半旬で増加しているが、その他の調査地域では平年並みか少なく推移している。各予察灯での最新の誘殺虫数は、鹿児島県病害虫防除所ホームページを参照。

イ 餌植物 (ヒノキ) 球果の県本土の着果量は、球果量指数60 (平年48) で平年と比べてやや多い。地域別では北薩と始良はやや多, 南薩と大隅は並である。今後、新成虫が増加する可能性があるので注意する。



注1) 平年：過去10年間の平均値。調査方法：南さつま市金峰町100の水鏡灯、鹿屋市 福生町家光灯と白色蛍光灯(20W)を併設、他は40W蛍光灯
 注2) いちき串木野市湊町の9月第4半旬から10月第2半旬までのデータは、予察灯故障・搬運のため欠損

図 予察灯での果樹カメムシ類の誘殺虫数の推移

餌植物 (ヒノキ) の球果量指数

調査地域	本年	平年
南薩	43(並)	44
北薩	75(やや多)	51
始良	73(やや多)	53
大隅	46(並)	43
県本土	60(やや多)	48

- 注1) 球果量は目視による遠視調査 (30地点), 評価は7段階
 2) 球果量指数は愛媛県 (2018) による。
 3) 球果量指数: ((極多地点数×7)+(多地点数×6)+(やや多地点数×5)+(中地点数×4)+(やや少地点数×3)+(少地点数×2)+(極少地点数×1)) / (総地点数×7) ×100
 4) 平年は2014~2023年の10年間の平均, () は平年比

V. 茶 樹

1. チャ

(1) 炭疽病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率46%（平年48%）：並

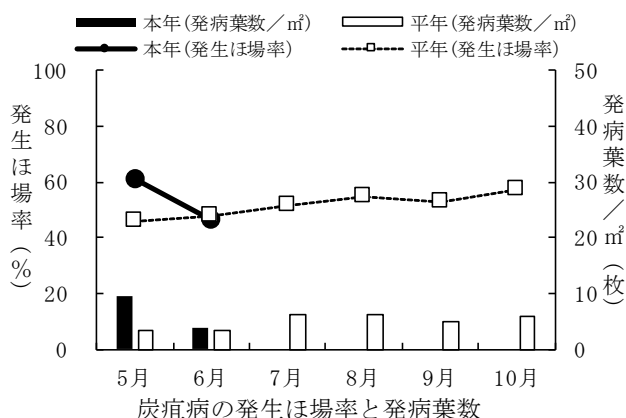
1 m²当り病葉数3.7枚（平年3.5枚）：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 本病に弱い、やぶきた、おくみどり等や多発ほ場では、萌芽～1葉期に予防散布を行う。

(イ) 三番茶期は萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期（摘採前日数）を厳守する。

(ウ) 更新園では、裾部に残った病葉が伝染源となり再生芽へ感染するため、1～3葉期に予防効果のある農薬で防除する。



(2) 輪斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率15%（平年15%）：並

1 m²当り病葉数0.9枚（平年1.1枚）：並

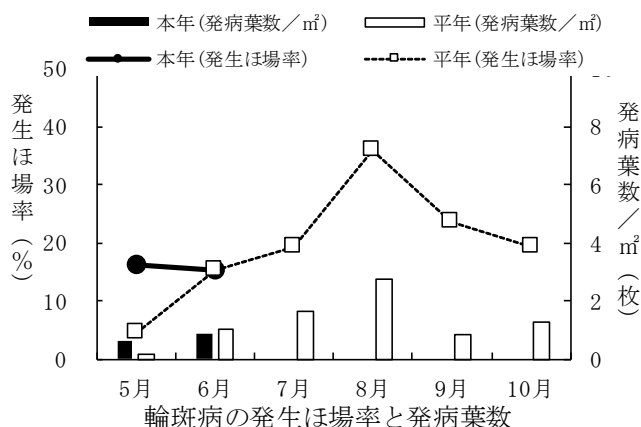
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 農薬の使用時期は、保護殺菌剤を使

用する場合は摘採直後に、浸透移行性の農薬を使用する場合は摘採3日後までに散布する。

(イ) 本病に弱い品種^{注)}では、更新園においても再生芽の整枝直後に農薬散布を行う。

注) 弱：やぶきた、おくゆたか、さえみどり、はるみどり、やや弱：あさつゆ



(3) チャノコカクモンハマキ, チャハマキ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

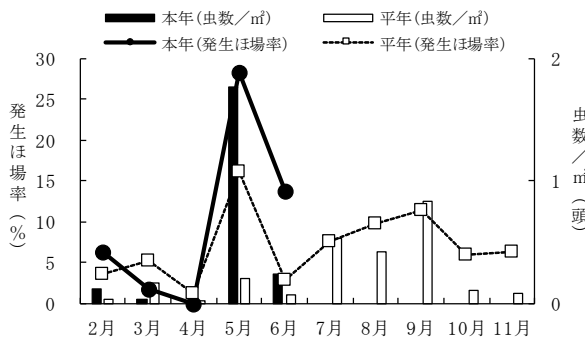
(イ) 発生量 チャノコカクモンハマキ 多
チャハマキ 多

(ウ) 発生時期 チャノコカクモンハマキ 早い

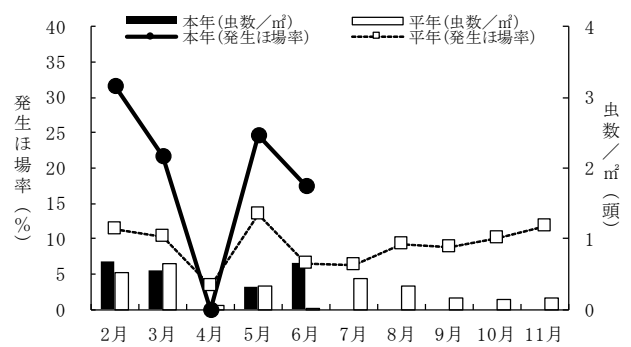
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

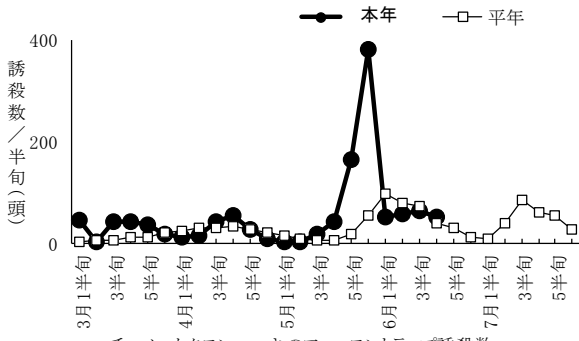
	チャノコカクモンハマキ	チャハマキ
発生量	多	多
発生ほ場率	14% (平年 3%) : 高い	17% (平年 6%) : 高い
虫数 (1 m ² 当たり)	0.2頭 (平年0.1頭) : やや多	0.7頭 (平年0.02頭) : 多
＜南九州市知覧町フェロモントラップ＞		
誘殺数 (5月第1半旬～6月第4半旬)	843頭 (平年399頭) : やや多 (+)	126頭 (平年368頭) : やや少 (-)
第一世代の発蛾ピーク	早い	—



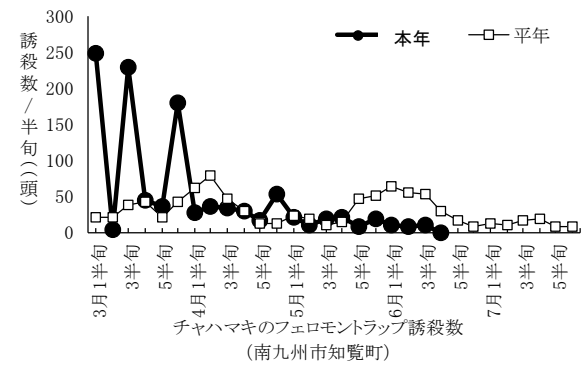
チャノコカクモンハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャハマキの発生ほ場率と㎡当たり虫数



チャノコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)



チャハマキのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生量・発生時期は地域間差があるので、フェロモントラップ等で発生状況を把握する。
- (イ) 農薬による防除適期は、ふ化～2 齢期（発蛾最盛日の10～15日後）である。
- (ウ) ジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。

(4) チャノホソガ

ア 予報内容

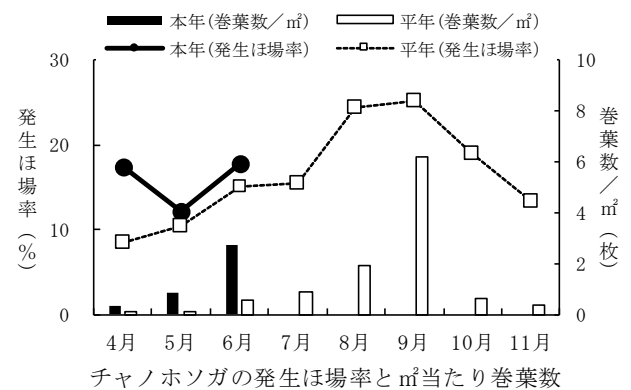
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多
- (ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

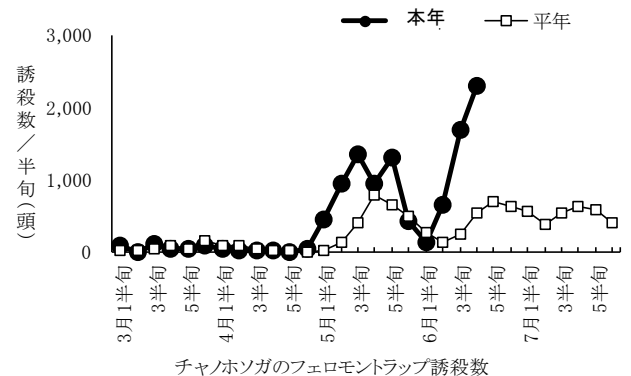
- (ア) 調査結果 発生量：並
- 発生ほ場率18%（平年15%）：並
- ㎡当たり巻葉数 2.7枚（平年0.6枚）：多
- <南九州市知覧町フェロモントラップ>
- 誘殺数（5月第1半旬～6月第4半旬）
- 10,155頭（平年3,659頭）：多（+）
- 第二世代の発蛾ピーク：早い

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 三番茶期の萌芽～1 葉期に防除を行う。
- (イ) 三番茶期は、萌芽から摘採までの期間が短いので、農薬の使用時期（摘採前日数）に注意する。
- (ウ) IGR剤及びジアミド系薬剤に対する感受性が低下している地域があるので、地域の栽培暦に従って農薬を選択する。



チャノホソガの発生ほ場率と㎡当たり巻葉数



チャノホソガのフェロモントラップ誘殺数
(南九州市知覧町)

(5) チャノミドリヒメヨコバイ, チャノキイロアザミウマ

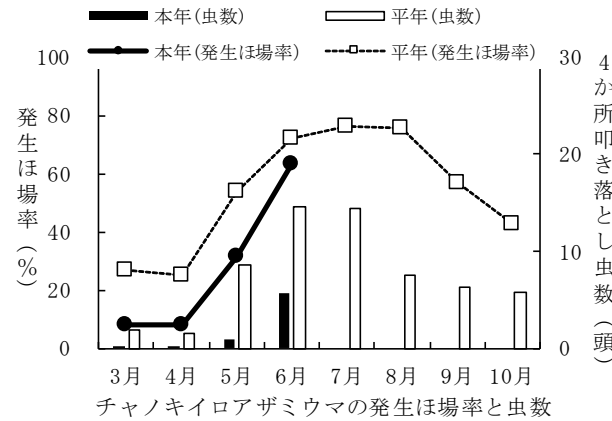
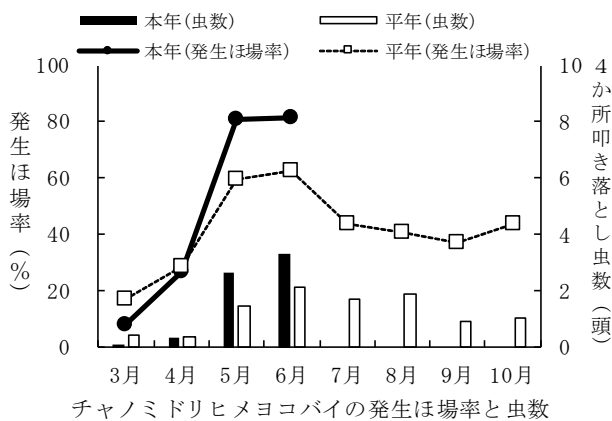
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 チャノミドリヒメヨコバイ 多
チャノキイロアザミウマ 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果

	チャノミドリヒメヨコバイ	チャノキイロアザミウマ
発生量	多	並
発生ほ場率	81%(平成 62%) : 高い	63%(平成 72%) : 並
虫数(4か所叩き落とし)	3.3頭(平成2.1頭) : やや多い	5.7頭(平成14.5頭) : やや少



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 新芽を加害するので、三番茶萌芽期頃に防除する。
- (イ) 更新園では、萌芽～1葉期に防除する。

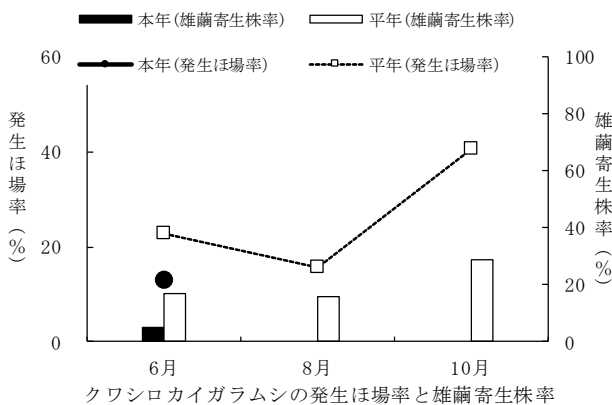
(6) クワシロカイガラムシ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや少
- (ウ) 発生時期 早い

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量 : やや少
発生ほ場率13% (平成23%) : やや低い
雄繭の寄生株率5.0% (平成17.2%)
: 低い



(イ) 有効積算温度による防除適期 (第二世代ふ化最盛期) 予測

地点	ふ化最盛期		
	本年	前年	平年
枕崎	6月23日	6月27日	7月2日
加世田	6月25日	6月30日	7月4日
さつま柏原	7月7日	7月13日	7月15日
溝辺	7月12日	7月18日	7月20日
鹿屋	6月28日	7月4日	7月8日
志布志	7月3日	7月7日	7月10日

注1) 予測は、アメダスの日平均気温(6月20日までは本年観測値、6月21日以降は平年値)を用いた。
 2) 有効積算温度は、アメダス観測値より算出した第一世代ふ化最盛日の翌日を起算日として積算した。

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 農薬はふ化最盛日から5日以内に、枝や幹に十分かかるように散布する。なお、ふ化最盛日は地域によって異なるので、ふ化状況を調査してふ化最盛日を確認する。

(イ) 更新園でのふ化最盛期の防除は、茶株内の枝幹へ薬液が付着しやすく高い効果が期待できる。

防除に関する今月の留意事項

1. 農薬の使用について

近年、てん茶、有機茶、輸出茶等栽培が多様化している。また、近年更新園が多く、更新の時期や程度により防除時期が園地により異なる。このため、農薬を散布する際は、隣接茶園等へのドリフトがないように十分注意するとともに、摘採前日数を遵守する。また、摘採前であることを知らせる「旗」の設置等により周辺の生産者に知らせる等、ドリフトが起こらないよう十分に注意喚起を行う。

2. 更新園について

更新園は、芽の再生が園によって異なり生育期間が長く、萌芽～生育初期に病虫害の集中加害を受けやすい。更新後の生育を順調に進めるため、病虫害対策（チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ、チャノホソガ、カンザワハダニ、炭疽病、輪斑病、新梢枯死症等）は適切に行う。

3. チャトゲコナジラミ

本年の発生ほ場率は46%（昨年78%）と昨年より発生が減少しているが、発生が中程度のほ場もみられる。多発するとほ場に入った際に成虫の乱舞で作業性が低下し、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生するため、光合成能力が低下する。

(1) 三番茶摘採園では裾刈りを行うことで寄生葉が除去され密度低下が期待できる。

(2) 農薬による防除では若齢幼虫期への効果が高い。また、本虫には天敵のシルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない農薬を使用するように努める。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋等）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には農薬がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は、住宅地及び畜舎に隣接するほ場や、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. 毒性が強い農薬は、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬及び使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等に基づいた総合評価。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+）、（-）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用いている。